業 績 説 明 書

橋本 博文（大阪公立大学大学院 文学研究科）

【6】 ※**Hashimoto, H.**, Li, Y., & Yamagishi, T. (2011). Beliefs and preferences in cultural agents and cultural game players. *Asian Journal of Social Psychology*, 14, 140-147.（被引用数：64）

本論文では、東アジアの人たちの相互協調的自己観の反映として理解されてきた「同調への選好」に対する再解釈を提示し、日本人の間で示される同調行動は、あくまで集団主義的な社会（悪い評判が立つことによって、自分が属している集団から排除されることによる損失があまりにも大きい社会）のもとでの他者からの否定的な評価を避ける適応戦略の反映であることを実験室実験の結果に基づき主張している。加えて、文化心理学的アプローチが想定する人間像（文化的エージェント）と本論文において提唱されているアプローチが想定する人間像（文化的ゲームプレーヤー）の相違点を整理しつつ、心や行動の文化差を理解する上での後者のアプローチの有用性を明確にしている。

【11】 ※**Hashimoto, H.**, & Yamagishi, T. (2013). Two faces of interdependence: Harmony seeking and rejection avoidance. *Asian Journal of Social Psychology*, 16, 142-151.（被引用数：128）

本論文では、文化心理学の理論における鍵概念の一つである「相互協調性」に焦点を合わせつつ、適応論の視座に基づけば弁別すべき相互協調性の二側面（調和追求と排除回避の側面）が存在すること、さらに、日米における相互協調性の本質的な差異は排除回避の側面においてのみ示されることを調査結果をもとに議論している。特筆すべきは、調和を重んじ、まわりの人たちと協調することを好むというような調和追求の側面には、理論的にも実証的にも日米差が示されない可能性を議論している点にあり、心や行動の文化差を理解するためには、文化的自己観の反映という観点のみならず、社会的環境への適応の道具としての観点が重要であることを主張した論文でもある。

【13】 ※**Hashimoto, H.**, & Yamagishi, T. (2015). Preference-expectation reversal in the ratings of independent and interdependent individuals: A comparison of participants from the United States and Japan. *Asian Journal of Social Psychology*, 18, 115-123.（被引用数：28）

本論文において報告されている日米比較調査によれば、日本人は「相互協調性」としてまとめられる生き方を採用したいという文化的選好を有しているわけではなく、相互協調的な生き方を採用しなければまわりの人たちから好ましく評価されないと予測することによって、そうした生き方を“採用せざるを得ず”、今度は、そうした“せざるを得ない”かたちで採用された行動が、人々の予測を再帰的に生み

だしている可能性が示されている。つまり、一般に「相互協調的」と形容されるような文化特定的な行動は、文化的自己観と一貫する個々人の心の性質によって支えられているというよりも、そうした行動を採用させる誘因（自分の行動に対する他者からの好ましい反応群）によって支えられていると考える方が妥当であることを本論文は明確にしている。さらに本論文では、こうしたゲーム論的な視座に基づき、心と文化の関係を動的に捉えるアプローチの有用性が強調されている。

【20】 ※ **Hashimoto, H.** (2021). Cross-generational differences in independence and interdependence: Discrepancies between their actual and ideal selves in Japanese cultural context. *Frontiers in Psychology*, 12:676526.（被引用数：7）

本論文では、相互独立性と相互協調性の年齢による差異を検討した二つの研究を報告し、日本人の間では年齢が上がるにつれて相互独立性の一側面である「自己主張」の得点が高くなり、相互協調性の一側面である「排除回避」の得点が低くなる傾向にあることを明確にしている。また、こうした年齢による差異は、回答者の理想としての自己にあらわれるのではなく、あくまで現実としての自己にのみ示されることも併せて議論している。さらに本論文では、現代の社会を生きる日本人（とりわけ若年層）は、相互独立的な生き方や考え方を志向しつつも、排除回避的な生き方や考え方を採用せざるを得ない状態にある可能性を主張している。

【24】 ※**Hashimoto, H.**, Maeda, K., & Matsumura, K. (2022). Fickle judgments under moral dilemmas: Time pressure and utilitarian judgments in interdependent cultures. *Frontiers in Psychology*, 13:795732.（被引用数：7）

道徳ジレンマ課題の代表例である「トロッコ問題」では、多数の命を救うために一人を犠牲にする功利主義的な判断と、結果の善し悪しにかかわらず一人の命を犠牲にすることは許されないとする義務論的な判断のどちらを優先するかが問われるとされる。これら二つの判断を扱う先行研究においては、義務論的判断と自動的な直観システム、そして、功利主義的判断と論理的な熟考システムとを関連づけた議論が散見されるが、本研究では、時間的制約を設けた場合での判断と熟慮のための時間や話し合いを経た後での判断を比較する実験を行い、先行研究とは異なり、熟考システムと義務論的判断との結びつきの方が強い可能性を示している。そのうえで本論文では、いわゆる義務論的判断は、義務論に基づく感じ方や考え方というよりも、他者の命に自分が関わりたくないといった責任を回避しようとする心理によって導かれている可能性についても議論している。